

会員の皆様へ

今回、日本放射線影響学会第41回大会を長崎市で開催し、学会の運営に幾許かの貢献ができることを関係者一同大変光栄に思っております。長崎は、広島と並んで原爆の洗礼を受けた街です。その街で新しい世紀への秒読みが始まったこの時期に、国連の軍縮会議に引き続き、放射線影響学会を開催することができたことは、放射線影響研究に携わる我々にとって身の引き締まる思いがします。

振り返れば、人類の歴史の中で、放射能ほど光と影の両面を我々に晒したものは無かつたでしょう。人類は、地球上で唯一、自分の力で文明を作り出す知恵を備え、文化的で快適な生活を支える様々な手段を開発してきました。しかし、こうした文明活動が地球環境のバランスを壊しつつあることが指摘されるようになっています。原子力もそうした英知の賜物の1つです。しかし、一方では、世界の各地でいまだに安全保障の手段として核兵器に頼るという虚妄が根強いことに対して我々の無知を嘆かずにおられません。

こうした時代の流れにあって、これまで、放射線研究者は、原子力の安全利用に資する研究を行ない、放射線医療、診断の技術開発や放射線利用に伴う生命の安全を保持するための基礎的知識の集積に多くの力を注ぎ大きな成果をあげてきました。また、放射線研究は、基礎生命科学の分野でも、生体修復機構の発見など常にパイオニア的役割を果たしてきました。そして、1990年代の半ばから、放射線研究は、全く新しい局面を迎えていると過言ではありません。それは、生命が誕生以来、36億年に渡ってその影響から逃れられなかつた放射線ストレスに対する生命の応答機構をつかさどる仕組みが、生命維持のために最も基本的で必須のものであることが次第に明らかにされてきたからです。この仕組みは、温度や重力や酸素といったストレスに対する応答機構と重なり、生命は、これを基本に、多彩な生物機能を作り上げてきたと思われます。生命の存在自体が、環境の中で周りの環境と全く異なった状況を作りだし維持することにあることを考えれば、周囲の環境との相互作用を明らかにすることによって生命の本質を理解できるという考えは受け入れやすいものです。人類の文明活動の結果として、吹き出している環境破壊や幅広いストレスなどの問題を解決し、健やかな生活を21世紀に引き継ぐために、益々、基礎科学の役割は大きいと言えましょう。なかでも、歴史的に、物理、化学、生物、環境、さらには社会科学など幅広い学問範囲をカバーし、研究に領域を作らなかった複合領域・放射線研究の果たす役割は大きいものと考えられます。

こうした意味から、今回の大会を引き受けるにあたって組織した実行委員会では、本学会の実施重点目標を、(1)出来るかぎり学会員の研究を引き出し、学会員の研究活動の活性化を狙う。(2)21世紀に活躍する年代の人が21世紀に向けた提案をできるようにする。(3)十分な討論が尽くせるようにする。の3点に置いて企画してきました。この目的がどこまで果たせたのか、些か不安な面もありますが、これまでになく若い大学院生の発表が目立ち、影響研究の前途に明るいものを感じます。

本大会が会員各位の役に立ち、学会の活性化に少しでも役立ったと評価して頂くことを、関係者一同願っております。

1998年12月

日本放射線影響学会第41回大会大会長
渡邊正己

